

— 西北大学を訪ねて —

出席者 (ABC順)

大学工学部教授 三木英雄

大学商学部教授 大原信一

大学経済学部教授 笹田友三郎

〈中国の大学〉

笹田 昨年の六月に西北大学の郭校長先生が同志社へお見えになりましたときに、西北大学と同志社大学の学術交流と、新島基金による留学生の受入れのお話がなされたようでございます。そのとき両大学の学術交流に関する覚書が作成されたのでございますが、それについてもっと具体的な話し合いをするために西北大学を訪問することになりました。

総長先生ご夫妻と三木先生、それに本部の木村課長と工学部の稲垣事務長と私の六名で、三月の終りに西北大学を訪問したわけでございます。たまたま訪中団の学生を引率してこられた大原先生と西北大学で一緒になりました。

西北大学では、総長先生は日本の大学について、私は日本の経済と計画について話をさせていただきました。

三木先生はそのあいだに西安交通大学を訪問されましたが、まず中国に第一歩を踏み出したときの印象から、先生に口火を切っていただきたいと思います。

三木 上海に着いたときから至れり尽くせ



りの歓迎をしていただきました。ですから、
西北大学にお伺いして、遠いところまで来た
というような感じもなく、非常にアトホーム
な気持ちでお伺いできました。西北大学では
校長先生はじめ皆さんの心からの歓迎をうけ
て感激しました。西北大学からおみえになっ
たときに、同じようなもてなしができるかど
うか、言葉はちょっと変かもしれませんが、
怖いような気持ちまでいたしました。ほんとう
によかったと思っております。

笹田 正確にはわからないのですけれど
も、いただいた資料をみますと西北大学は一
九三七年にできて、日本でいう学部にあたる
ものは、文系、理系、工系と三つに分かれて
いるようです。文系のなかに中国文学とか歴
史、哲学、経済学、外国語などが、理系のな
かには数学、物理、化学、生物、地質、そし
て工系は化学工業だけでございます。日本と
同じように四年制で、学部の学生が三、一〇
〇名、大学院にあたる研究科の学生が八〇名
となっております。西北大学は同志社大学の
ほかに京都大学やミシガン大学と交流の協
定を締結しております。

大原先生、中国では大学というのはどのく

らいあって、日本の大学と比べてどういう特
徴をもっているのでしょうか。

大原 大学の数は約六〇〇ですね。そのな
かにはいわゆる大学と、日本のかつての専門
学校レベルのものも含まれています。

日本の大学との違いは、純然たる教育機関
ということ、研究と教育とをかなりはっき
り分けているようです。大学というのは教育
するところで、先生もむしろ教育を大事に
し、教育に必要な研究をやるといのがいま
までの性格でした。

もうひとつの違いはやはり学生の問題でし
ょうか。全部が国立大学で、原則として全寮
制です。非常に多数のなから大学へ進学で
きるのはいパーセントないし三パーセントく
らい、言いかえれば選ばれた少数精鋭といっ
た感じで、非常に勉強に熱心です。そういっ
た点は日本の学生との違いじゃないでしょう
か。ですから国家のためというような意識が
たいへん強くて、日本の学生が聞くところよ
うに変な感じをもつのですけれども、国家のた
めに勉強している、成績が悪いと国家のため
に申しわけない、といった気持ちがあるよう
です。



笹田友三郎 氏

いまの三木先生のお話に関連してですが、私たち学生とだいたい行動を共にしたのですけれども、団体で地方をまわって西安へ着いたわけです。各地で中国の人たちはいへん親密に話しかけてくれ、いたるところで友好を深めることができたのですが、とくに西北大学では同年齢の学生がたくさん迎えてくれました。歓迎会の席上でもあるいはキャンパスのなかを見学している最中でも、たいへん親密に話をしておりまして、まさに一〇年の知己のようでした。どうも不思議なんですが、皆が皆中国語がしゃべれるわけでないか、皆が皆中国語がしゃべれるわけでもないか、皆が皆日本語をしゃべれるわけでもないか、皆が皆日本語をしゃべれるわけでもないか、筆談を交えたり、英語と中国

語を交えながら、非常に仲よく話し合っておりました。ですから今回の私たちの旅行のなかで、学生諸君も西北大学の訪問がいちばん充実して、朝から夕方まで一日おっただけですけれども、非常に有効で、とても感激したと言っております。

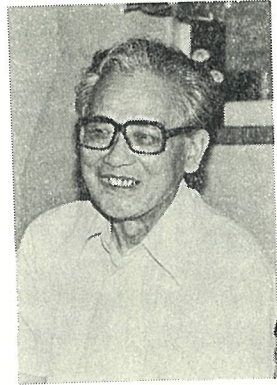
さきほど三木先生もおっしゃったのですが、西北大学の人が同志社を訪問された場合に、それだけの規模もてなしができるかどうか、そのためには訪中団のメンバーを中心に、そういう人たちが来たときに歓迎できる組織をつくっておかなければならぬといった話も出ました。同志社大学日中友好協会という会をつくって、毎年中国あるいは西安へ送りたいということ、むこうから来られた場合に、そういう組織が中心になって歓迎の態勢をつくりたい、そこまで話すつもりです。

笹田 私は経済学専攻の学生に話をするということもありましたので、経済系の主任の先生と、もちろん通訳を交えてですけれども、打ち合わせをする機会がありました。いま大原先生は純然たる教育機関とおっしゃいましたけれども、経済学の課程でどういう科

目が開設されておって、どの程度のことか教えられているかについてはよくわかりませんでした。帰りましてから、木村さん宛に送ってきた資料をみますと、専門の科目数も日本の大学とそうかわってはおりません。計量経済学も科目としてはありますし、経済活動分析というのもあります。ただ、研究のレベルがどのくらいかということ、もうひとつよくわかりませんでした。大原先生は何度もおいでになったことがありますし、むこうの大学におられた経験もありでしょうから、お話ししていただきたいのですが、この点はどうでしょうか。

大原 さきほど教育と研究が分離されていると申したのですが、基本的にはそうだろうと思うのです。ところが最近の研究というものにはかなり重点がおかれているのは事実で、大学にはいろんな研究所がどんどん設けられているようですね。そういう意味では日本の大学のような研究と教育を並行させる方向へ最近かわりつつあると思います。ですから、西北大学にも研究所がいくつか設置されているんですね。

笹田 そうですね。黄土研究所とか黄土高



大原 信一 氏

原地理、農薬、合成化学、あるいは歴史や古文学の研究所があるようですけれども。

大原 ごく最近、私たまたま研究室の本をフツとみましたら、西北大学の中文系が編集しました魯迅に関する論文集なんです。それは純然たる学術書なんですが、そういうものを西北大学の中文系の研究室が中心になってまとめております。ですから、いわゆる研究活動もさかんにやっているわけです。

笹田 同志社の新島基金で西北大学から経済学を専攻する大学院の学生をこちらへ送りたいという希望があり、それで私がお供することになったのですが、国費では工学系の学生が日本やアメリカへずいぶん出ておるようですね。

三木 中国全体としてはずいぶん出ておる

ように聞いております。

笹田 三木先生は西安交通大学も訪問されましたが、むこうでの工学系の教育の内容とか研究のレベルについて、なにか特別の印象をもたれましたでしょうか。

三木 私は総長先生や笹田先生が西北大学でお話をされている時間帯に交通大学にまいりまして、先生のお話が終わるころには西北大学へ帰らなければならぬという、ごく短い間の訪問でした。うかがった範囲でごくあらましを申し上げますと、西安交通大学というのは、もともと一八九六年と申しますから八五年ほど前に上海にできておりました理科系の大学が、一九五六年に上海から西安に一部が移って、分校のような形でつくられ、五九年に独立して西安交通大学となったようです。

教育面から申しますと工学系の大学なんです、九つの学科から成り立っています。そのなかで大きく分けると、機械工学に関係した学科が三つ、電気工学に関係した学科がやはり三つ、あとは教養的な数学とか基礎課程、それからもう一つ管理工学といいますが、工程管理のようなことをやらせる学科、こういう形で編成しておられるようです。研

究所の話も出ましたが、七つの研究所と、実験室が四〇あります。そういう形になっておるようでございます。

全体としましては、学生が約二、〇〇〇名、教職員が一、五〇〇名という数なんです、交通大学全体としては六、五〇〇名という話で、数の勘定がよくわからないのですが、一般の作業員のような方や用務員のな方がずいぶんおられるようでございます。

大原 私も六四年に訪問したことがありますが、まずキャンパスの広いのにびっくりしました。

三木 じつはキャンパスは直接歩いてみることでできませんでしたが、図書館の一階に大きな模型が置いてありまして、大学のキャンパスと同じくらいの居住区域があつて、ずいぶん広い地域です。実験室あるいは学科の内容その他をもう少し詳しくうかがいたかったのですが、時間がなくなつて、概略を承つて帰ってきたようなことでございます。パンフレット等で拝見しますと、さきほど大原先生のおっしゃいましたように、教育という面で相当力を入れて、基礎的なことをやっておられるようでございます。

〈日本と比較して〉

笹田 話が飛びますけれども、三木先生、帰りがけに上海で、もとソ連がつくった建物で工業展覧館といたしましたか、そこに、いまの中国の技術水準でトップにある製品がいろいろ展示してございますね。ああいうのは先生の目からごらんになって……。

三木 私、その点は専門のようで素人なものですから、よくわからないのですが、想像以上にびっくりなものをつくっておられるように思いました。ただ、日本の最近の様子から見ますと、率直に言って少し差があるのじゃないかと感じました。とくに工業製品につきましては……。

大原 上海のトップレベル、ということは



三木英雄氏

中国のトップレベルで、それが展示してあるのですけれども、はたして実際に量産されて市場へ出ているかどうか、これはまた別の問題なんですね。

笹田 私は実は経済管理について話をしてくれという注文をきいておりました。そのときに正直申しまして、「経済管理」という言葉でいったい何を意図しているのか見当がつかなかったのです。むこうへ行って経済の専門の先生に訊きましても、これはまだ十分なじみのある言葉ではなく、ばく然と使っているということでした。経済管理という言葉で表現しようとしておられることは、大体こういうことじゃないかという見当はつくような気がしましたけれども。

いまの中国の経済は、原料の調達ひとつをとってもスムーズにはいっていないようです。動力もそうですし、品質管理の面でも問題があり、廃品率が高くて、効率も良くありません。人事についても、組織についても、バランスがとれていない、あらゆる意味で管理が十分にできていないことがいちばん問題になっているようです。ですから、完工のめどが立たないようなプロジェクトが幾つ

もあり、電力が不足しているので、でき上がった粗鋼が食庫で眠っているというようなことがあるそうです。そういうことを全体としてうまく調整していかなければならないので、こうした調整とか、計画の修正とか、効率とかを経済の管理と言っているようです。

そのことはわかったのですが、それに関連して、日本の経済発展に関心が強く、社会主義の国ですけれども、経済学の分野で日本に留学生を送って勉強させ、市場原理も導入していかなければならないし、経済の効率も問題にしなければならぬということになったのではないかと想像しております。

ところで、三木先生からお話があったのですが、上海は中国でもっともレベルが高く、工業展覧館に展示してあるものはおそらくいまの中国で最高水準のものでしょうけれど、工学というか、技術の面ではかなりギャップがあるのでしようね。

三木 あそこには最新のものが展示されていたと思います。しかし工業製品なんかをみても日本だったらちょっと出さないだろうと思うようなもの、たとえばトランジスタがずっと並べてあるわけです。日本では単体の

トランジスターというのは時代おくれの感じで、全部集積回路になってしまっておりまして、そういう形にまでこれから行く必要があるのではないかと、単体のトランジスターの形でいま並んでいます。そういった全体としてのバランスがうまくとれてないという気はいたしますね。あるところで非常にいいものがあった、それが品質が完全に管理されて、どれをとっても同じ性能が出るかどうか、その辺が問題じゃないかと思えます。

大原 だから、たとえば研究とか開発とか、そういう能力は個々にすぐれていても、それを生産するというのが全体としてうまく動かない、そういう印象をうけますね。

笹田 そういうことはあるでしょうね。三木先生とはご一緒だったのですけれども、西安から始皇帝の墓に案内してもらいます途中で、あれは発電所じゃないかと先生がおっしゃいました。やはり原子力発電所だったのでしょうか。

三木 よくわかりませんが、大きなもののでした。冷却塔と同じ形でございまして……。

笹田 帰ってきてある書物を見ましたら、発電所は中国は四、五〇〇万キロワットで、

イギリスやフランス並みだそうですね。日本は一億二、五〇〇万キロワットですが、中国はほとんどゼロに近いところから出発して三〇年でそこまですったので、非常に発展はしているようです。けれども、一人当たりの発電量をとると、中国は日本の二三分の一だけです。日本の昭和一〇年前後の発電量しかないそうですから、電力不足はかなり大きいようです。

結局、電力不足のために工場の操業が十分でないということから、消費財が不足しているということになるのでしょうか。

大原 そうでしょうね。ですから、たとえば上海なんか人間が多いとよくいわれるのですが、繁華街はウィークデーでも朝からたくさんぞろぞろ歩いています。そういう光景をみますと、いったいいつ働いているのだろうと思えます。

笹田 私もそういう印象をうけました。若い人が朝からうろろしているなと思つたのですが、三交代制がほとんどの工場であられるようです。

三木 やはり夜の余った電力を使わなきゃいけないということですか。

大原 電力についていうと、一般の家庭は非常に節約しております。夜なんか、目が悪くなるのじゃないかと思うくらい裸電球一本で、非常に節約しています。ほかの物の値段からみて電力は割高らしいですね。ですから、日本へ里帰りして冷蔵庫や洗濯機を持って帰った主婦が、とても電気料金が高くなるので、それを使えないというようなことを言っておられますね。

笹田 中国ではわれわれの想像を絶する面がたくさんあります。日本では発電量も多く、面積が限られていて、送電のロスが少ないのですが、中国ではそういう点では国土が広いので大変なようです。ですから、上海は技術の水準がいちばん高いというお話もありましたけれども、電灯の明るさも上海は特別なんだそうですね。

送電のロスひとつをとってみても、どこかでつくつたものを中国全土に輸送するということは、たいへんなことなですね。上海でつくつたものを東北とか西北にもってゆくの、輸送のコストが高くて、お手あげというところのようです。

三木 そうでしょうね。戦後復興して非常



西北大学における上野総長の講演「現在日本の大学について」

に発展した日本のいまの時点からみますと、一時代古いなという感じは率直に言ってください。ただ、いまの電灯の話じゃありません。けれども、われわれは電力をあまりに安易に使いすぎているという面は反省しなければいけないと思うのです。中国のほうではもう少し利用するほうに問題があると思いますけ

れども、日本と同じようにまで行くというのは、これはまたしんどいのじゃないかと思えます。

大原 中国において日本へ帰ってきますと日本の生活にはずいぶんむだが多いと思いませんか(笑)。

笹田 中国がいま経済の管理者とかエンジニアを留学生として日本やアメリカへどんどん送っていますか……。

大原 日本の江戸時代に長崎を通して外国と接触していたほどではないですけども、これまでは非常に限られた窓口しかなかったようです。それがいまだれくらい出ているのでしょうか。京都だけでも一〇〇名を超える公費留学生が来ているようです。これは圧倒的に工学部関係でしょうが、日本全体ではおそらく一、〇〇〇名を超えていると思います。

笹田 これも三木先生と一緒に車に乗っているときですけども、ラジオのスイッチをひねったら、日本語の講座でカキケコとかハヒフヘホとかやっておりました。ものすごく盛んなようです。

大原 おそらく最近ですと、中国全土でい

ろんな形で日本語を勉強している人、ラジオの講座を聴いている人が圧倒的に多いわけですが、そういう人たちを入れるとおそらく一〇〇万じゃなくて、その倍くらいじゃないかというのが専門家の推測です。

私人の体験によりますと、七五年の夏に旅行したのですが、そのときに外国人にみやげものを売る人です。こし日本語を知っている人がいました。ところが、その次の年から二年間私は上海へ日本語を教えに行っていたわけですが、その間ラジオ講座のテキストがずいぶん売れて、数十万の人が聴いているという話を聞きました。工場へ見学に行っても、工場の責任者が「こんにちは」「どうぞこちらへ」という日本語をつかう人がいました。急に日本語を勉強する人がふえたなと思っておりました。それは七六年ごろですが、最近の数年間ですらにふえています。それがかなり年輩の人から若い者、労働者から大学の先生方まで日本語をやっておられて、日本にたいする関心は非常に強いようです。

日本の先進技術に追いつき追い越すということもあると思いますが、やはり外に開かれた窓口というと、一般の人にはとても外国へ

行く機会はないわけですから、外国語を学ぶということでしょう。英語と日本語が圧倒的に多いのじゃないですか。

三木 英語か日本語ができますとよい職につける、そういったことのために日本語を勉強する人が多いことを聞きました。

大原 外国語をやっていると、外国語を使う職場といえますか、そういう仕事につけますし、うまくゆけば外国へ行ける機会もあるということで、外にたいする関心が強くなったわけですね。とくに日本語は、中国の人にとっては共通の漢字を使っているということですので、なんとなく親しみやすいということがあると思います。これは日本の学生なんかの中国語履修とよく似た状況なんですから。

〈中国の風物〉

笹田 私たちは西安では大原先生と一緒にりましたが、帰りには夜行列車で、りっぱな寝台車でしたけれども、無錫で降りしました。無錫で一泊して、次に蘇州で一泊しました。それで上海経由で帰ったわけです。

私は正直申しまして、これまで中国に強い

関心をもっておったわけではありません。かつて地理を専攻したとはいうものの、中国についてはあまり知らなかったのです。「南船北馬」という程度のことには知っておりまして、パール・バックの『大地』を中学生のころ読んだ程度ですが、最初の強い印象は、上海に着く前にクリークが網の目のようにめぐらされているのを空から眺めてびっくりしたことです。

三木 クリークという幅のせまい川かと思つと、りっぱな運河ですね。

大原 北のほうへ行くとそれがなくなるわけですね。

笹田 そうですね。蘇州がまた日本流に言えば水の都なんでしょうが、水路が縦横にはりめぐらされていました。そこで聞いた話では、解放後つくられた運河はすぐだめになつたそうですね。

三木 水がうまく流れないとか、逆流したりとかね。

笹田 いちばん最初につくられた大運河というのは二、〇〇〇年くらい前ですが、とにかくずいぶん古いですね。それがいまでもびくともしない、非常に高い水準の土木技術だ

そうですね。

大原 そういう水利工事を、解放後の技術面はともかくとして、どんどんつくることができたのは、農村が協同組合から人民公社へと集団化をしていって、水利工事を個人の利害とは無関係にどんどんやれるといった面があるのじゃないですか。

笹田 あれは解放後のもずいぶん多いわけですか。

大原 多いでしょうね。昔は土地の問題とか水利権とかあって、そう簡単にやれなかったでしょう。私も北京で学生諸君と一緒に行ったのですが、十三陵という明時代のお墓があります。そこに十三陵ダムというのがありますが、一九五七、八年くらいにでき上がったそうですが、北京に近いから北京の最高幹部はじめみんな勤務に行かれました。周恩来さんもそこでモッコをかついでおられる写真があります。ただ、十三陵ダムにはいっこう水がたまっていないんですよ。できた当時は満々と水があつたけれども、漏るのだそうですね。技術的にも問題があるようです。

三木 私の印象というよりも、ちょっと気



西安市大慈恩寺大雁塔前にて
(右から上野総長、甘西北大学教研室副所長、木村庶務課長、上野総長夫人、笹田教授、三木教授、李西北大学日語科主任)

んか人が多いから、文字どおり歩道をはみ出して歩いています。そういうところを車が縫って走るわけですから、クラクション鳴らしどうしですね。

自転車はベルを鳴らして接近します。

こういう笑い話があります。上海の日本領事館の人が日本から車をもってきたわけです。ところが日本の車はクラクションのところがよくいたむのだそうです。日本ではそんなに鳴らさないのです……。

三木 禁止されていますものね。

大原 すぐ取り替えねばなりません。取替えても、またすぐいたむという笑い話をしておりましたけれども、それくらいクラクション鳴らしどおしです。ですから、少し高い所に住んでいますと、前後左右の道路を走る車が一齐に鳴らす音が集まってきました。私は二年間、ホテルの一四階にある学校の宿舍におったのですが、日夜クラクションの音に悩まされました。二、三カ月たつと少しは慣れましたが、とにかく騒音のなかで暮らしていました。

笹田 「黄塵万丈」とい言葉があります。雨が降っていたからそれほどでもなかつたのですが、西安はほこりっほい街という感じがしました。

三木 ほこりっほいというのは、車で走ったので……。

大原 とくにあの辺りは黄土地帯でしょう。黄土が乾燥すると塵になって舞い上がり、雨が降ると道はぐじゃぐじゃになります。

笹田 家も煉瓦を積みかさねた上に泥を塗って……。

大原 あの辺の農家ですと、お客が入っていくと、坊さんがよく持っている払子(ホッス)というのですか、先に毛のついたもので家の人が払ってくれるのです。

笹田 すす払いみたいなものですね。

大原 そういうものが一軒の家にちゃんと備えつけてあります。

笹田 私はさきほど言いましたように日本経済の発展について話をして、最近の自動車産業にもふれたのですが、自動車産業が米國に追いついたとか言いますが、あの兵馬俑坑を見せられまして、日本で自慢するようなものは何もなかったと少々気はずかしくなりました(笑)。

大原 交通の問題は日本とずいぶんちがうわけですね。たとえば赤信号、あれは車は守るが、人間は必ずしもあれを守りません。

三木 ヨーロッパ的ですね。

大原 日本人は信号が変わるといので走ったりするわけですけども、中国の人は信号にかかわらずに自由に歩きます。上海な

大原 あれは一部でして、始皇帝の陵の周辺の一部がたまたまみつかったのですが、まだ漢の武帝の茂陵とか、唐の高宗の乾陵とか、ずいぶんたくさん周辺にはあるようです。おそらく毎週一回ずつまわっても、一年ではとてもまわり切れんほどそういう遺跡があります。そういう考古学上の発掘作業はいっぺんにはやれないわけで、かなり長期的な計画を立ててやるのだということを書きました。

笹田 上海の人口が一、〇〇〇万を超えているというのにもびっくりしましたが、これは周辺部をふくめてのことなんでしょうね。

大原 上海は市街部で一〇区、まわりに一〇区あります。市街部、農村部を含めて一〇区一〇区といえます。私の知っている人が上海の人口を知っていますかと言うから、一、〇〇〇万か一、一〇〇万と答えると、いや、もっと多い、だいたい二、〇〇〇万いると言います。それは半分くらいは幽霊人口だということ、じつは私の家も弟の息子を学校へやるためにあずかっていますという話をしておりました。この人は幹部クラスの人です。そういう話をしますと、いや、上海は特

別なんだと言う人もありますが、とにかく一、〇〇〇万というのと二、〇〇〇万というのはとえらい違いですけれども、実感的には二、〇〇〇万に近いというのがほんとうじゃないかと思えます。とにかくどこへ行ってもぞろぞろ人が歩いていきますから。

笹田 省の外に出るには許可がいるらしいですね。そうでないと上海とか北京に集中して……。

大原 都市への集中を防ぐためでしょう。だから、職場なんかでも転勤は非常にむづかしいのです。

笹田 ですから、高級中学ですか、年に七〇〇万人ほど卒業する労働力を吸収するのが非常にむづかしいそうですね。実際に失業はかなりあるようですね。

大原 失業というより待業ですね。失業もできない人たちです。最近では、そういう待業青年のために小規模のサービス業を開業させる方向のようです。

笹田 それがとくにここ二、三年の門戸開放以来の政策の一つになっているようですね。午前中ぶらぶらしている若い人を見るのも、昼夜三交代制のほかに待業がかなりある

からですね。

大原 各大学なんかで何々大学出版社というのをつくって、出版事業を始めるようになりました。一つの新しい動きになっています。ほとんどん学術書を出しています。私も日本文法の研究書をもったのですが、こういう出版社をその大学の教職員の子弟のためにつくったということを書きました。

笹田 官僚主義というのですか、就職にしても、非常にしやすい人とそうでない人とがあるようですね。

大原 世襲ということではないけれども、おやじさんが何かの職についておって辞めた場合は、かわりに息子がそこへ入りやすいとか。私の知り合いになった方の奥さんが五〇を過ぎておられるのですが、娘さんはどうさされましたと私は訊いたのです。娘は私の工場へ身代りに入れましたということ。だいたい労働者ですと、女五〇歳で定年なんです。ちょうどその年になられたと思うのです。けれども、娘さんと交代された。男も女もそのようですね。むしろそれを奨励しているようです。

笹田 三木先生と私が行きましたのは、上



西北大学本館玄関から中央広場を望む。野外集会場の後は新校舎

海、西安、無錫、蘇州、それだけなんですけれども、三木先生はどこがいちばん印象深かったですか。西安以外はみなそれぞれ一日だけなんですけれども。

三木 すべてについて言うと、スケールが大きいというか、数が多いということを感じました。それから蘇州がいちばんおちついて

……。

笹田 われわれ関西におるものには、黒い屋根瓦に白壁の家がある蘇州には親しみがもてますね。

大原 蘇州というのは、まちの雰囲気合わない煙突は立てさせないとか、そういうことを抑えてきたらしいですね。

スケールが大きいといえは、時間の觀念も日本人とちがうのじゃないでしょうかね。

笹田 社会全体の奥行きが日本とは全然ちがうでしょうから、あちらの人たちは大人という言葉がびったりという感じがしました。島国の人間とは対照的です。

大原 古いものの保存ということについても考え方がちがう点がありますね。日本人だと、こんな古いものをもつたいないことをすると思うのですが、むこうの人にしてみると、それは昔からこうだったもので、そんなに大事なものだといままで気がつかなかった、といったことがあるわけです。日本人が行くと、これはもつたいない、ずいぶん値打ちがあるものだというから、むこうもそうかいなということになって……。

こうしたことはもちろん数字ではあらわせず

ませんし、言葉でもなかなか適切に表現できないですね。

笹田 ただ、ここ一、二年中国では調整の季節だというふうにいわれておるようですが、けれども、門戸を開放するという考え方にはこれからも変わりはないのでしょうかね。

大原 もう急激な変化はないでしょう。

笹田 近代化というのは両刃の剣だとおっしゃる人も多いようですし、これも三木先生と一緒に聞いた話ですけれども、いま上海で暴走族が出はじめているそうです。暴走族というのはもちろん日本流にいえばの話ですけれども。そういう点で、とにかくみな同じ家に住んで、同じものを着て、同じものを食べてという物質的な平均主義というものは、だいぶ変わってくるのじゃないでしょうか。

大原 収入面で、たとえば同じ労働者にしても、奨励金とかでかなりいい額をもらえる人と、それから中学校は卒業したけれども、小さな町の食堂でギョウザづくりをするというような人も出てくるわけです。そうすると、同じ勤労者でありながらも毎月の収入に格差が出てきます。あるいは高級官僚の息子さんで、いいポストについて、身ぎれいな格

好をして、かなりの収入をもらうとか、そういった格差は、いままであったといえなかったのですね、それがもつとはつきりするでしょうね。

〈より深い交流を〉

笹田 そうした状況のなかで中国との交流がますます深まっていくと思いますけれども、たとえばプラントとか機械が中国の近代化に必要だということで、いま経済援助や技術供与がすすめられています。中国はせっかくにやっているわけですけれども、中国が輸入する機械は、日本やアメリカという社会の文明、あるいはその背後にあるシステムを具現していると思いますと、機械だけもつてくれればいいというものではないと思います。その点はどうなんでしょうかね。

三木 機械とか技術でいま表現されましたが、いちばん最終的に目につくそのものだけをもっていきましても、それは裾野が必要なのですね。裾野のひろがり、その地盤の堅さというものがあるかどうか心配ですね。

先端の技術だけもつてきて、それでフィッティングできるかどうかということです。たとえばネ

ジ一本にしても、下でちゃんとする素地がないと上のものはつくれません。

何かをつくらうという場合に、採算を度外視してたくさんつくれば、そのなかに何パーセントかいいものがあります。それをうまく拾い集めてくればできません。それをもまくすが、そのコストは非常に高くなっているわけですね。最初に技術が入ってくる、それ合うようなものをそういう形でつくり出していくことはできないでしょうけれども、それいいのはいかがでしょうかね。

大原 三木先生は裾野とおっしゃいました。私はそれを教育の問題だと思っておりますが、小学校も中学校もとくに大都会ではかなりがっちりした教育をやっているけれども、中国全体でみると、必ずしも教育のレベルは高くありません。教員の質の問題もあります。最大の問題は教員の待遇が悪く、軽視されているといったことになるでしょう。ですから、先進技術を入れてレベルアップしようと思つたら、小学校の先生の問題から解決しなければいかんのではないのでしょうか。

笹田 中国では僻地がすいぶんあります。そういう僻地云々のむつかしさだけでは

なくて、学校の校舎を建てること以外のこと……。

大原 いま教師の問題を出しましたけれども、月給が安いとか、先生というものの社会的地位があまり高くないでしょう。

それはなにも文革でそうなったのじゃありません。とくに文革中はそうだったと思えます。要するに月給が安くて、とてもこれではお嫁さんがもらえないとか、そういう表現になるのですけれども。

いま大多数の少年少女の夢は、国営の大きな工場の労働者になることでしょうね。これは以前も今もそんなにかわりません。労働者は小学校の先生に比べれば収入がよく、同じ二〇歳、三〇歳と比較しても、労働者はグッとよくなっているといったことですね。

笹田 それでも、近代化を進めるうえでやはり教育の問題は大事なんじゃないでしょうか。

大原 いま教育の重要性ということがとりあげられておりますけれども、そう早急に何パーセント一律アップというようなことは簡単にできることではありません。結局、財源の問題とか何とかいうことになるのでは

うね。

笹田 そのことに関連していまいちばん重大な問題は何でしょうか。

大原 問題ということになると、やはり人口問題じゃないのでしょうか。

笹田 子供一人しかつくらない……。

大原 ええ。しかしこれまた一〇年や二〇年ではちよっと……。

笹田 中国の人口一〇億といわれておりますが、ほんとうにそうなんですか。それは統計そのもの、あるいは情報そのものが確かでないということもあるし、それが一部の人のしか握られてないということのようですね。ですから、権力をもっている人しか情報をもっていないということのようですね。

大原 人口の数にしても、工業部門で握る数と農業部門のそれとちがうらしいですね。それにしても九億何千万というのが最近の公表数です。しかし刻々ふえていくわけだから、現時点ではおそらく一〇億に達しているか、あるいはそれを超えているかで、中国の指導者の話では、今世紀末には一二億になると言っております。それはたぶんいまの一人っ子政策をずっと続けてでしょう。だからこ

れをどうやって養っていくかという問題提起があるのですけれども、そういう人口の重圧がいろんな面にあらわれて、教育はもちろん、住宅とか、職業とかの問題ですね。だから、一人っ子政策というのは、われわれが聞くとき、そこまで国が干渉せんでもいいじゃないかという気もするんですけども、客観的に見てやはり大切な問題のようです。

私、結婚した若い人の新居を訪問している話なのですが、ちょうど赤ちゃんが一人生まれたところでした。きみたち何人つくのかと訊いたら、いや、一人です、誓いました、ちゃんと申請しましたと言います。子供一人しかつくらないという申請をすれば、それに応じた手当があります。住宅も配給があったようです。しかし申請したにもかかわらず実際には二人できてしまったという場合には、逆にこんどは税金をとられます(笑)。

地方によって多少ちがうようですが、とにかく人口問題は私もいちばん深刻な問題じゃないかと思えます。

笹田 いろいろお話は尽きないと思えますけれども、いちばん最初に申しましたように、私たちは同志社大学と西北大学との交流



帰路無錫市錫惠公園にて同志社代表団一行
陳叔通さん、甘様征さん、案内役の無錫市外事弁公室李華さん、
上海復旦大学劉建華さんの顔も見える。

を具体化するという目的でまいりました。大原先生は訪中団の学生を引率しておいでになりまして、ずいぶん感動的な場面もあったようですが、最後に、交流をもっと盛んにし、実のあるものにしていくという点からのご感想と、今後どうしたらいいかということもふまえて、締めくくりにひと言……。

大原 同志社大学友好訪中団という名前で

全員二五名、そのうち学生が二二名という構成で行ったのです。一年くらい前から計画を立てておりました、はじめは北京、無錫、上海と考えていたのですけれども、西北大学との交流があるということ聞きまして、学生の間からぜひ西北大学を訪問したいという希望がでてきました。そこで北京、西安、上海というコースに変わりました。

私はいままで五、六回、短期の旅行をやり、その間二年間ほど上海外国語学院で日本語を教えておったのですが、その経験からみますと、今回の旅行は非常な歓迎をうけたという感が強いのです。これは日本と中国の関係が友好条約の調印というふうに、段階を追って交流が深くなってきたという背景もありますけれども、やはり若い人たちは中国の人にとって親しみやすいというか、学生諸君は戦争の傷がないわけで、フランクに中国人とぶつかれるということで、その点は私の想像を絶するような形で交流ができました。

一つの例を申しますと、最近の「ウォークマン」というカセットを持って歩いている学生が二、三人おりました、それを聞きながら歩いているんですよ。中国の若者がそれを貸

してもらってびっくりしまして、これはすばらしい音が出るということで、一人に貸すことから次に中国人が集まってきて、交流がひらかれます。年寄りが行ったらいかんとは言いませんけれども、若者をたくさん送るべきだということを感じました。

私は学生諸君といっしょに行くというのはかねての念願でもあったのですけれども、図らずもそういう形で学生諸君と中国をまわることができました。それだけではなくて、中国の人たちとの交流を深めることもできました。学生諸君は、さきほどふれたように西北大学の学生とまる一日、めしを食いながらもいろんな話をやっております。一人ずつの間で友情がめばえたということは私にとっても非常にうれしいことです。これからこの友情を彼らがどういふふうに進展させていくか、期待をもつてみているわけです。

西北大学の訪問で印象的だったのはいま言いました中国人との間の友好ということと、それから上野先生が老軀にむちうって西安までゆかれたということが学生諸君に多大の感銘を与えたわけなんです。とにかく西北大学から代表団がみえて、むこうの校長さんが来

られたときに、われわれで歓迎しようじゃないかということからはじまって、そういう組織づくりをやるとういうことになりました。

これから西北大学から留学とか、あるいはいろんな形の交流で人がおみえになるでしょう。その方たちにはできるだけ日本のいろんな方面の勉強をしていただきたいと思えます。日本は中国に何を援助できるかを考えますと、やはり人をよんで、その人が日本から学ぶべきもの、日本から採り入れるべきものを発見して持ち帰ってもらうのがいちばんいいと思うんですね。

そういう意味で、人数の枠は限られておりますけれども、できるだけいろんな分野の人が同志社に來られるように、同時にまた同志社大学としては、西北大学だけでなしに、中国のいろんな大学からも受け入れるようにしたいと思えます。これから人間と人間との交流ということがいちはばん大切なことでありますし、新島基金による留學生の受け入れは非常に有意義な事業であると思つて、大きな期待をもつて見ておるわけです。

笹田 どうもありがとうございます。

(一九八一年七月三日・於有終館担当理事室)